

私たちは「サポチル」という京都にある子供の心理的援助を目的とした NPO の組織を訪れた。自分はなぜそういった組織を作ろうと思ったのかに興味があった。というのも、学生のうちは各学校にスクールカウンセラーが派遣されたり、教育相談室があったりと、日本の公的な心理援助サービスは充実していると思っていたし、果たして会員のカウンセラーの方がほぼボランティアとして働く意義があるのかそこに疑問があったからだ。

しかし実際に訪れて話を聞くうちに自分の見えていないところ視覚となっていた部分が明らかになった。「サポチル」は無料で、発達的な障害や、心理的な問題を抱えた子供を連れてくる親子を支援することも活動の一つだが、児童養護施設に住んでいる子供の心理的な支援を中心に行っている。一般会員の方が施設から「サポチル」までの送迎を行い、正規会員のカウンセラーの方がプレイセラピーや自由連想法などの精神分析などを行い、子供の心理的な援助を定期的に行っているらしい。実際に公的な支援の一環として、カウンセラーが児童養護施設を訪れる制度はあるようだが、それだけではまったくもって足りないようだ。自分はそういった施設を一度も訪れたことはないためわからないが、そういった施設にいる子供たちは独特な雰囲気を出しやすい。そして幼少期に愛着が得られなかった分、後天的にアスペルガー症候群や、発達的な障害を示す子供が多いらしい。自分の先輩にも ADHD の方が一人いるが、その方が育った環境を聞く限り父親は DV を振るうは、アルコール中毒だはで、家庭はほとんど崩壊していた。まともな家庭環境で育った自分のような人間ですら、心理的な援助を時として必要とするのだから、児童養護施設に預けられてるような子たちは、もっとしっかりとしたサポートが必要に決まっている。代表の話を聞いてくうちに、自分の考えがどれだけ浅はかだったかを思い知らされる結果となった。代表の方の「日本は公的な心理的サポートが他の先進国と比べて欠けている」という言葉が印象的だったが、確かに自分の生きてきた 20 年間を振り返ってみて、もっと心理的な援助を受けやすくなるべきだと感じた。中学校時代を振り返ってみて、先生からの体罰や、部活では靴を投げられたり、ボールをぶついたり、けったり殴ったりといういじめが日常化していた。しかし自分は何もできないし、先生は鈍感すぎて気づかない、スクールカウンセラーもずっと部屋に閉じこもっているだけの給料泥棒だった。だれも自分たちを助けてくれる人はいなかった。今だって同じだ、バイト先では一人の社員が明らかに店長からのいじめを受けている。何かあればみなその人を攻め立て、その人だけロッカーがない。前の店舗にいたときはもっと仕事ができて社交的な人物だったらしいが、いじめのせいでいつもびくびくしていて、飼い主からの暴力におびえる犬のような様子だ。仕事もだんだんとできなくなってきて、みんなに無能だのなんだの言われている。しかしバイトの身では店長に歯向かったら次は自分が標的になるかもしれない、黙って店長の悪口に賛同して店長の犬になるしかない。こういった状況で一人でも企業のカウンセラー的な人物がいれば、状況は少しましになっただろう。今起きている問題は解決とまではいかないが、少しは良くなると思う。しかし京王グループは利益を追い求めすぎるあまり、そういった問題には目が向かない。いじめが発覚すれば、企業は損害賠償を払わなければならないし、

イメージも損なわれる。資本主義を追い求める企業側にとってはカウンセラーという存在は、邪魔者なのであろう。自分が社会というものを触れる機会はバイト先くらいしかなく、今のバイト先がこのような状況では、日本の社会に失望せざるを得ない。いったいブラックだろうがホワイトだろうが関係なく企業に勤めている人の中で今心から自分は幸せだと言える人はどれほどいるのだろうか。少なくとも自分は誰かが誰かをさげすむ様子を見て不快にしか感じない。もしこれが企業のごく一般的な風景だというのなら、自分は社会から隔離されたアタラクシア的な環境を選ばざるを得ない。こんなところに毎日いたら心がすさむに決まっている。

日本は戦後急速的に経済が発展していき、GDP世界一位にまで上り詰めた。自分たちが今満足に食事をとれているのも、着るものに困らないのも、先人たちの真面目でひたむきな努力の恩恵なのだろう。しかし今日本は生活水準が高く、先進国と呼ばれているが本当にその生活は満たされているだろうか。自分にはサラリーマンの3分の1がうつ病にかかる、毎日のように電車で人身事故が起こる日本社会が良いものだと思えない。日本は資本主義、効率主義を追い求めすぎて、人の心というものを置き去りにしてしまったような気がする。今の便利さの裏側には多くの犠牲が伴っている。便利さ裕福さが幸せの根源だとは思えない。

自分はアメリカで貧しくても、人間との絆、友情、家族を大事にして、幸せな生活を送っている人間をたくさん見てきた。彼らは昼間から **Liquor Shop** に行き、マリファナをホームレスから買うどうしようもない奴らだったが、英語がほとんどしゃべれない自分のことを大切な友達だと言ってくれた。そこはどうしようもなく治安が悪く、汚い街だったが、社会的弱者に対して優しかった。福利厚生がしっかりしているとか、政府がどうのこうのという話ではなく、高そうなスーツに身を包んだ男性が、ホームレスにたばこやドル札を分け与えてる様子など、まったくの他人同士の思いやりや、親切心にあふれていて、そこに住む人たちは自分には幸せに見えた。また自分もそこでの生活は楽しくてかけがえのないものだった。

治安の良さ、裕福さが幸せを囿る水準とは限らない。日本は人同士の絆というものが欠けている。上っ面のみの関係性しか築けていないから、自分のバイト先のような負の環境が作られてしまうのだ。

しかし国民性というものは変えることが難しい。日本は今本当の幸せに気付いてない人が多い。不幸を感じている人を救うために、心理的なケアは老若男女に対して必要だ。やっと臨床心理士の資格が国家資格化された。人の心というものが重宝されつつある。自分は臨床心理士になって、一人でも多くの人を救っていきたくて再び感じた実習となった。